

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 25 日現在

機関番号：34507

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2012

課題番号：21520648

研究課題名（和文）英語学習者および日本語学習者の言語意識に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Basic Studies on the Awareness of Language by English and Japanese Learners

研究代表者

梅原 大輔 (UMEHARA DAISUKE)

甲南女子大学・文学部・教授

研究者番号：70232907

研究成果の概要（和文）：本研究では、外国語学習者が対象言語の形式的側面をどのような意識をもって内在化しているのかを、数量的研究にとどまらず、学習者の言語意識を取り出す方法によって究明することを目指した。主要なプロジェクトとして、通常明示的に教えられないことのない主語と主題の区別を日本人英語学習者がどう認識しているのかを調べるための大規模な調査を行いし、英語学習の到達度と母語からの転移の影響に大きな関係があることを示唆する結果を得ることができた。

研究成果の概要（英文）：This series of studies aimed to investigate how foreign language learners internalize, or gain implicit and/or explicit awareness of, the formal aspects of the target language. The main research project was to conduct a large-scale survey on the awareness of subject/topic distinction by Japanese college EFL learners. The results strongly suggest that learners with lower achievement are prone to be influenced by first language transfer based on a translation strategy.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：英語学・英語教育学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：英語教育・日本語教育・主語・文法教育・言語意識・言語転移

1. 研究開始当初の背景

母語話者が持つ複雑で高度な文法能力を外国語学習者がどのように獲得するのか、という問題は、外国語教育にとって中心的な課題の一つである。ナチュラルアプローチやコミュニケーションアプローチでは、形式上の正確さよりもコミュニケーションの流暢さを重視し、特に前者は外国語の場合も学習者自身が無意識に文法を獲得する能力を持っていると考えて明示的な文法教育の必要性を

否定した。一方で、コミュニケーションな教授法を踏まえつつも、学習者に形式面に対する意識を向けさせ、規則の発見を促す文法意識高揚活動、社会文化理論、フォーカス・オン・フォームのような指導理論・指導法も提案されている。更に学習方略の研究では、「良い外国語学習者」は規則を意識的に使ったり、対象言語と母語の相違点を考えたり、部分の意味から全体の意味を推測したり、といった形式面を意識した方略を使うことが指摘さ

れている。特に日本のような外国語環境で英語を学習する場合、学習者が対象言語に対して何らかの意識的な判断を持たずにいることはまず考えられない。

ただし、学習者は指導された内容をそのまま理解したり、母語の文法的特徴をそのまま転移したりするだけでなく、独自の判断のもとに中間言語を構築していると考えられる。梅原(2007)は学習者の中に、*Let's sing a song*はいいが*Let's be friends*はだめだとか、*Let's playing basket-ball*はだめでも*Let's cooking*は正しいと判断する者が多数おり、これらの使い分けについて教師の想定しないような独特の解釈を与えている例を紹介している。また梅原(1999)では、学習者が英語と日本語の多義性や比喻に関して、共通した誤解を持っている例を指摘している。

2. 研究の目的

(1) 外国語学習者が持つ言語意識の記述

外国語学習者はどのような意識をもって学習中の言語の諸側面、特に文法の規則的特徴を捉えているのか。またそこには学習者間で共通した特徴が見られるのか、第一言語と対象言語の違いに影響を受けるのか、といった点を調査、記述し、中間言語の特徴として情報を蓄積していくこと。

(2) 外国語学習者が持つ言語意識の形成に関する研究

外国語学習者の言語意識、特に文法や構文に対する意識はどのように経時的に形成されるのか。学習者の習得レベルと言語意識の間には何らかの関係があるのかを解明していくこと。

(3) 外国語学習者が持つ言語意識の評価方法の研究

外国語学習者の言語意識を客観的に評価する方法は開発できるのか。学習者の文法や構文に対する見方は学習者の年齢や習得レベルから予測できるのか、を解明していくこと。特に、量的な評価だけでなく、質的な評価方法を取り入れること。

(4) 言語意識教育の可能性に関する研究

外国語学習者の言語意識を高めるためにどのような取り組みが可能か。外国語教育と国語教育はこの点についてどのように連携できるのかを考えること。

いずれの点についても、日本人英語学習者、外国人日本語学習者の両方向から扱うことを目標とする。

3. 研究の方法

(1) 外国語習得モデルについての予備的研究

生成文法による言語モデルに加えて、認知言語学や構文文法による言語理論へのアプローチが盛んとなる状況をふまえ、外国語教育の場に認知的なアプローチをどのように

取り込むことができるかについて、資料的研究を行う。

(2) 日本語と英語の対照研究

日本語と英語の対照研究を通して、日本人の英語学習者あるいは外国人の日本語学習者にとって障害となるような項目を精査する。従来の研究で中心的に取り上げられてきた拘束形態素や、中学や高校の英語教育の中で一般に明示的な学習指導を行う項目ではないものを調査対象として取り出す。

(3) 学習者文法の記述のための調査方法についての研究と調査の開発

学習者の文法能力を量的・質的に調査するための調査方法を検討する。特に文法性判定テストに関する問題点を精査し、改善を試みる。また、予備的な調査を少人数のグループを対象として実施し、本調査に向けて項目を検討する。

(4) 学習者文法の記述のための調査の実施

以上の各点を踏まえて外国語学習者を対象にした文法意識についての調査を実施する。

(5) 海外の日本語教育における指導アプローチと教材の研究

海外の日本語教育の場でどのような指導方法がとられているかを、主として教材とシラバスの面から調査する。特に、中等教育で英語の母語話者に対して日本語教育を盛んに行っているオーストラリアを日本の合わせ鏡と考え、オーストラリア国内で編集、使用されている日本語教科書を集めてそのシラバスと文法指導のアプローチを検証する。

4. 研究成果

(1) 外国語習得モデルに基づく英語教育法の研究

近年の言語習得モデルを踏まえて、特に次の3点の重要性を確認した。

①「文法の指導」を「正確さの指導」と位置づけること。

文法と語彙を連続的なものとしてとらえる立場に立てば、定型表現や半定型表現を活用し、初級段階からでも正確さを目標にする指導が可能だと言える。文法とコミュニケーションを対立させるのではなく、文法を習得段階に応じた正確さの指導と位置づけることができる。

②文法の指導に「基本レベル」の考え方を取り入れること。

認知言語学で提案された基本レベルカテゴリーを文法に援用することができる。抽象度の高い文法用語や概念を性急に導入するのではなく、具体的な意味と形の対応関係が意識できる「基本レベル」の構文を初級段階で重点化するという発想が共有されるべきではないか。

③学習者言語の理解のために、認知的アプ

ローチを積極的に取り入れること。

規則ベースの処理と用例ベースの処理が併存しているという二重モードの言語観、語彙や構文と文法との連続性、意識的な学習から習得への転換可能性といった認知的アプローチの考え方が、英語教育の現場で共有されるべきではないか。

(2) 調査方法としての文法性判定テストの研究

文法性判定テストについては、これまでも有効性をめぐる論議がなされており、時間制限を設けた場合には暗黙の知識を、時間制限をかけない場合には明示的な知識を試すことになるという考えがある。このような考え方は普遍文法に基づく暗黙の言語能力を測定することを想定しているが、認知的言語モデルでは語彙と文法の区別は明確なわけではなく、意識的に学習した語や構文を使う能力も含めて言語能力であると言える。特に外国語環境での学習の場合、意識的な文法の判断力も含めて学習者の言語能力を判定している。

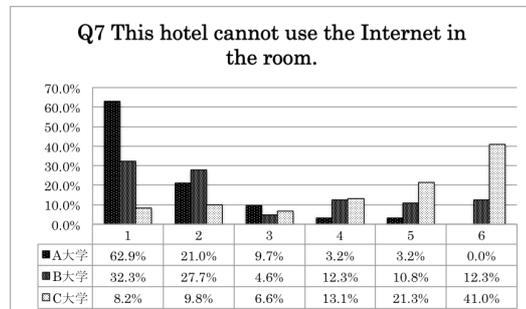
文法性判定テストを直感的な正誤判断で行うのではなく、あいまいな判断も反映できる多値的なものにし、さらに説明・訂正タスクによって判断の根拠を記述させることで、学習者がどのような情報に明示的にアクセスしているのかを観察することができる。特に学習者が第一言語への翻訳戦略を通して対象言語を判断しているかどうかを評価できれば、第一言語からの転移が外国語学習に影響しているかどうかを評価する材料となる。

(3) 日本人英語学習者の主語意識に関する研究

英語が主語一述語型の基本構造を持つ言語であるのに対して日本語が主題一陳述型の基本構造を持つ言語であることは、言語類型論の立場からよく知られていることである。しかし、学校の英語指導の場で両言語のこのような基本的な違いを明示的に指導することは一般的ではなく、主語と主題の違いを学習者が明示的な概念として理解していることはまずないと思われる。一方で学習者の書く英文の中に、*This water can't drink.のような主題一陳述型構文の転移と思われるような誤文を見ることがある。これらをふまえ、日本人の英語学習者が日本語的な主題と英語的な主語の区別をどのように意識できているのかを、予備調査を経て選択した20文に対する多値的な文法性判断テストと説明・訂正タスクによって調査した。これまでに4大学約300人の大学生を対象にして調査を行った。このうち3大学分のデータから不完全な解答者を除外するなどして188人のデ

ータを集計・分析した。

最も典型的な「主題陳述型」の誤文例として使用した*This hotel cannot use the Internet in the room.については、大学によって次のような差があることが分かった。(下のグラフで1は「間違っている」、6は「問題ない」と判断していることを表す)



A 大学ではこの文を明らかに間違っていると判断している学生が 62.9%おり、合わせて 93.6%がこの文を誤文だと判断している。このグループの学生は主語の動作主性についての意識が高く、一貫性も高かった。日本語的な主題陳述型の文による影響をほとんど受けていないグループだと言える。一方で、B 大学や C 大学では学生の間にはばらつきがあり、C 大学では 40%を越える学生がこの文を問題のない文と判断した。

C 大学で一部の学生に対して行った追加的面接調査によって、この文を正しいと判断した学生はまた、動作主主語をとる You cannot use the Internet ~. という文も同時に容認していること、日本語への翻訳を通して判断する傾向のあることがわかった。またこの中には小学校入学前から英語を学びはじめ、高校で国際コースに所属していた学生もいる。

日本人の英語学習者が英語の基本的構文をどのように理解し習得しているのかをこういった規模で調査した前例はなく、英語学習の到達目標の設定などに示唆を与えるものと言える。

(4) オーストラリアの日本語教科書に見る構文の扱いについての研究

オーストラリアの中等教育機関に向けて編集された 20 数冊の初級日本語教科書を手し、そのうち 4 種類の中学校向けコースブックと日本で編集・発行された 3 種類の初級日本語教科書を比較した。文法項目をどのような順序で導入するかという点に焦点を当て、ガ格の扱い、形容詞の用法の扱い、コソア表現の扱い、動詞のマス形とテ形の扱いという四つの項目を取り上げた。その結果、オーストラリアの教科書では、他の多くの日本語教科書には見られないような教材の提示をしている面があることが確認できた。

例えば、日本国内の日本語教科書の場合、イ形容詞とナ形容詞の叙述用法と修飾用法を一気に導入する傾向にあるが、オーストラリアの教科書では「やさしいです」「たのしいです」「しんせつです」といった叙述用法を個々の語と結びつけて最初に導入し、修飾用法の導入やイ形容詞とナ形容詞の整理などはずっと後の段階で行われる傾向にあった。これは文法的な一般化を性急にするのではなく、具体的な構文を身につけることを意識している点で、認知言語学の視点から興味深い。日本の英語教育の場でも、特に小学校での導入方法や小中学校の連携という点で多くの示唆を得ることができる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ①梅原大輔、認知的言語モデルから見た文法性判定テスト、甲南女子大学英文学研究、査読なし、48号、(2012)、1-16、[http://www.konan-wu.ac.jp/~eibun/about/kenkyu/pdf/EIBUNKENKYU2012ALL\(N\).pdf](http://www.konan-wu.ac.jp/~eibun/about/kenkyu/pdf/EIBUNKENKYU2012ALL(N).pdf)
- ②梅原大輔、オーストラリアの日本語教科書の分析、甲南女子大学研究紀要文学・文化編、査読なし、48号、(2012)、39-46
- ③森篤嗣、「母語話者が書いた日本語メール文」に対する非母語話者の評価—中国系非母語話者3名の質的手法によるケーススタディ—、待遇コミュニケーション研究、査読あり、7巻、(2010)、81-96
- ④菅井三実、言語研究の複雑系的シナリオ、言語、査読なし、38巻10号、(2009)、54-59

[学会発表] (計4件)

- ①梅原大輔、富永英夫、日本人学習者は主語をどうとらえているか—量的・質的研究、大学英語教育学会関西支部大会、2012.11.24、京都産業大学
- ②森山卓郎、梅原大輔、富永英夫、Attributive *suru* in Japanese: a constructionist approach、6th International Conference on Construction Grammar、2010.9.3、カレル大学
- ③森篤嗣、フランス語母語話者の作文における日本語母語話者の評価—日本語教師と一般日本語母語話者による全体評価と部分評価の相関から—、フランス日本語教育シンポジウム、2010.5、インサ工科大学リヨン校
- ④宇佐美洋、森篤嗣、吉田さち、「非母語話者の書きことば」に対する日本人の評価観をめぐる量的調査、社会言語科学会研究大会、2009.9.19、京都大学

[図書] (計3件)

- ①菅井三実、開拓社、英語を通して学ぶ日本語のツボ、(2012)、202
- ②児玉一宏、他、研究者、言語習得と用法基盤モデル、(2009)、172

[その他]

ホームページ等

http://www.konan-umegumi.com/umegumi/efl_learners_top.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者

梅原 大輔 (UMEHARA DAISUKE)
甲南女子大学・文学部英語文化学科・教授
研究者番号：70232907

(2) 研究分担者

富永 英夫 (TOMINAGA HIDEO)
武庫川女子大学・文学部・教授
研究者番号：10180176

濱本 秀樹 (HAMAMOTO HIDEKI)
近畿大学・文芸学部・教授
研究者番号：70258127

森 篤嗣 (MORI ATSUSHI)
帝塚山大学・現代生活学部・准教授
研究者番号：30407209

菅井 三実 (SUGAI KAZUMI)
兵庫教育大学・学校教育学研究科・准教授
研究者番号：10252206

森山 卓郎 (MORIYAMA TAKUROU)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：80182278

児玉 一宏 (KODAMA KAZUHIRO)
京都教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：40340450

加藤 久雄 (KATOU HISAO)
奈良教育大学・教育学部・教授
研究者番号：40135827